少女の頃

霜月
小雨の降る寒い昼下がり
咳をしながら　僕は
病院の椅子に腰掛けている
診察室の扉が開き　そのままの
薄着になった十五六歳の少女があらわれ
僕の前を通り過ぎていった

少女はそのまま外へ出ていった

病院の大きな硝子戸の
その向こう側
少女は
かがみながら靴を

きちんと履き直している
グレーのスクールブレザーを　まだ
片手にしたままで

ショートヘアーの幼い横顔
白いブラウスをぬける
なおも白い肌
未成熟な胸のふくらみ
スカートから映える　白い
粒子のような
華奢な脚は
わずかに
白い靴下で覆われている

ぬくもりを
白い息に変えても

震えることなくたたずんでいる
その姿に
僕の
心の片隅に押し込まれた
洗い晒しの思い出が
蘇ってくる

あの初恋のやるせなさを
甘く熱い情熱を　残らず
白い息に変えても
震えることなくたたずんでいた
小さなたくましさを
少女の勇気を
僕は分かろうともせずに
ただ

とまどいに立ち尽くすだけの
不器用な少年だった

忘れていた思い出は
何のまえぶれもなく
あらわれては
消えてゆく
硝子戸に影をもたれかけた少女のように
音もなく
何も残さず
消えてゆく

僕の気持ちを分かろうともせずに
思い出だけを駆り立てて
小雨の中へ

消えてゆく